



大本山永平寺



彼岸会ひがんえ

少しずつ冬の寒さが和らぎ、雪解け水の流れる音が心地よく山内に響きわたります。三月になり次々と新しい修行僧が上山してくる中、春の彼岸会の季節となりました。

彼岸会とは春分・秋分の日を中日とした一週間のことです。この時期修行僧は特別な行持を通して仏道修行に励みます。永平寺でも春彼岸の中日には、法堂にて春季彼岸施食会が行じられます。「彼岸」は「到彼岸」の略で、梵語の「波羅蜜多」を訳したものとされ、「此岸」（煩惱と迷いの世界）にいる我々が仏道修行により到達できる悟りの境地のことを意味します。

このことについて道元禅師は、修行して彼岸に到るのではなく、迷い多き此岸こそが悟りの世界でもあると示しています。

菩提心を発すというは己れ未だ度らざる前に

一切衆生を度さんと発願し嘗むなり

悟りを求める心を発すということは、自らが救われる前に他の人々を救おうという願いを発し実践していくこと。

もし此岸においてすべての人がこのことを実践すれば、此岸と彼岸の垣根がなくなり、誰も彼岸に行く必要はなくなるでしょう。このことを「彼岸到」と表現されています。

道元禅師の御教えを学びつつ日々の行持がとめられています。

ご本山だより



大本山總持寺



「祈りの夕べ」 忘るまじ東日本大震災

厳しい寒さもようやく去り、暖かさを感じる時節となりました。

さて、東日本大震災から、まる三年となる三月八日、今年も總持寺大祖堂に於いて東日本大震災復興祈願「祈りの夕べ」が開催されます。

当日は、大勢の檀信徒の皆さまと一緒に般若心経をお読みして大震災で亡くなられた方々への追悼法要を厳修した後、福島県立安積黎明高校合唱部と世田谷学園吹奏楽部OBによる演奏会を行い、犠牲者の冥福と被災地の一日も早い復興を念じます。

さらに「桜プロジェクト」による江戸彼岸桜の苗木も、昨年暮れに被災地へ三〇〇本近くお届けすることができました。

今後、この桜樹が人々の心の拠り所になってくれればどんなにか嬉しいことでしょう。

皆さまからのさらなるご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

また、十八日から二十四日までの一週間は春季彼岸会です。

期間中、毎日多くの檀信徒の方々が参詣され、亡き御先祖さまの御霊に手を合わせます。

特に二十一日のお中日には、江川辰三禅師さまが大導師を勤められての大施食会だいせじきえが修行されます。

曹洞俳壇

選・村松五灰子

山仕事男ひとりの冬帽子

長崎県 崎田 定雄

評 間伐や枝打ち、下草刈りなど昔も今も大変な作業なのだろう。地下足袋や長靴。重そうな腰のベルトに鉋や手鋸など。ご自身の持山だろうか。「ひとりの冬帽子」に気概が込められている。

煤払終へて妻よりはめらるる

埼玉県 小林 茂之

評 一年のお掃除の煤払。一生懸命の結果の顔の汚れに奥さんが褒め、またそれを素直に「はめらるる」と句にさらりと言えるところが微笑ましい。暖かい夫婦である。

◆折り紙の山に谷折り日向ほこ

静岡県 土屋きよ子

◆大焚火残して漁師船を出す

三重県 山下 利夫

◆子育ての終りて久しお茶の花

静岡県 青山 清子

◆手になじむ小筆を買ひぬ十二月

埼玉県 橋本 永子

◆掃除婦が知らせてくれし冬の虹

秋田県 鈴木 ゆう

◆一枚の喪中ハガキや秋の暮

福岡県 安部 正和

◆しみじみと粥吹く冬の坐禅終へ

島根県 藤江 堯

◆実千両堂裏風のゆきどころ

愛知県 松井 暁美

◆被災地の冬菜といふを買ひにけり

東京都 長谷川 瞳

◆晩秋の仕上げ急かるる大工かな

静岡県 池谷 硬司

*選者吟

双眸そらばらは天平の世に古雛

五灰子

*作句小見

亡き父は土雛つちひなが好きで雛さまや十二単の官女や花魁おいらんなどを桃の節句から端午の節句まで飾っていました。その中には鯉を抱いている金太郎や弁慶・赤穂浪士、兜をかぶった戦国の武将。それらが皆薄汚れていて侍たちは目を剥いていて子どもこのころ恐くてしかたがありませんでした。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

「今でしょ」今年一番の流行語 けじめを
つけて生きてゆきたし 滋賀県 島崎 佳子

評 今年一番流行した言葉を捉えて、自分の人生観に結びつけたところが機知に富む。作者にとつての「今でしょ」は、折おりに節度ある行為を取ること、その折おりが「今でしょ」なのであろう。

独りにも馴れましたよと他人ひとに言う薄情者を遺
影は微笑む 兵庫県 前田あつ子

評 「馴れた」と言えるまでのその間の寂しさが、背景に流れている。「薄情者」を文字どおりに取る人はいないだろう。「遺影の微笑む」は安堵の微笑みなのだ。

◆自力にて百歩あゆみし病む妻と日暮れの庭によるこびんかっ 島根県 奈良 正義
◆宮川を渡る車輛しやうりくの鉄橋がじわじわ下がる潮の満ちきて 三重県 野呂 志

◆絵画とも錦の布とも紅葉していらかに映える雨永平寺 大阪府 足立 慶子

◆冬の雲浮く野の道を子ら駆けて隣の村まで遊びに行けり 福島県 大槻 弘

◆朝七時「おい、生きとるか」と障子開け夫が見にくる母逝きてより 山口県 横川美代子

◆冬薔薇のくれないの中で光ったあの日の君の白いセーター 東京都 鈴木 正作

◆雁鳴きてわたる西空にしろき月稲杭仕舞う刈り田に仰ぐ 岩手県 穴戸さとる

◆木造の校舎の机の凸凹で鉛筆折れてノートが破れ 奈良県 鈴木 重雄

◆野晒しの十六羅漢の並むなかに亡き父母に似る一つあり 秋田県 佐藤 和子

◆菜園で我の育てし黒豆を友等に配る晩秋の午後 広島県 小畑 宣之

*選者詠

あらたまの日にかざし見る十の爪あわれ人
差し指に星生あれ ちづ

*作歌小見

一首の中で、ことに大切な結句。横山さんの歌も結句の「母逝きてより」で立ち上がりました。四句目までのユーモアが、一気に現実味を帯びて切実感を感じさせます。小さな小さな喜びにも目を向けたという思いの拙歌です。